

MiYAGi

# まちづくりと 地域支え合い



移動販売取材する蔵王町の生活支援コーディネーター、小野聡さん(左から2人目)

## CONTENTS

2-3 「まちづくりの今」⑧ 栗原市若柳地区  
在宅も看取りも「つながり」があればこそ  
高橋由利さん(若柳地区担当生活支援コーディネーター)

4-5 「まちづくりの今」⑨ 蔵王町  
「福祉」は地域に、暮らしのなかに  
小野聡さん(蔵王町生活支援コーディネーター)

6 県外アンテナ  
つながりが災害時に命を守る 福島県金山町

7 2019年度第2回情報交換会を開催しました

8 宮城発セミナーの見所・聞きどころ紹介  
宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議事務局

宮城県内外の  
生活支援コーディネーターおよび協議体の  
取り組みを発信しながら、  
住民や専門職・関係機関の意識を高め、  
最後まで住み慣れた地域で暮らし続ける  
社会づくりを目指します。

vol.26  
2020.1

## 栗原市

【くりはらし】人口6万7220人(2万4929世帯)、高齢化率39.1%(2019年11月末)。市域は旧町村10地区に大別され、生活支援体制整備事業の第2層(日常生活圏域)を構成。生活支援コーディネーターは、第1層を市介護福祉課が組織として担い、第2層は市社会福祉協議会が各地区に1人ずつ配置。協議体は、第1層を同課が所管、第2層は各地区のコーディネーターが運営する。第2層コーディネーターは月例会議で、市と市社協は隔月の連絡会議で情報共有と活動方針の確認などを行う。

# 在宅も看取りも 「つながり」が あればこそ

## 高橋由利さん



高橋由利さん(伊豆沼を望む高台で)

### 要介護5でもお茶飲み仲間

「生活支援コーディネーターになると、それまで見えなかったものが、見えるようになりまし」

高橋由利さんは、2005年から市社会福祉協議会の職員として、地域福祉を目的とする行政区単位の住民組織「地区社会福祉協議会」の立ち上げと活動支援に携わってきた。2018年4月に若柳担当の第2層生活支援コーディネーターに就任すると、地区社協のような組織の枠組みにとらわれず、住民との関わりの幅を広げていく。具体的には、サロンのような場だけでなく、家での少人数のお茶飲みなどへも入っていくようになった。

それが、「見えなかったものが見える契機となる。

コーディネーターになってまもなく、ある高齢夫妻が家で友人らとお茶飲みをしていると聞き、訪ねた。

「そのお宅は、夫婦二人暮らしでした。81歳のダンナさんはパーキンソン病のため寝たきりで、79歳の奥さんが一人で介護してたんす」

夫は体を動かすことも、しゃべることもできない。要介護度は最も重い「5」。

「奥さんは、あくまでも在宅介護を続ける覚悟でした」

サービスは、訪問看護・医療と訪問入浴以外、利用していなかった。

その家に少なくとも週に1度、70〜90歳の女性たち3、4人がやって来て、お茶飲みや食事をとみにする。

「皆さん同じコーラスサークルの仲間、奥さんが介護のために週1回のサークル活動に出られなくなると、仲間が夫婦の家でお茶飲みをするようになったそうす」

その楽しいひとときが、妻の精神的な支えになっていくと、高橋さんは見抜いた。

女性たちは、居間のベッドに横たわる夫にもよく話しかけた。たとえ会話ができなくとも、夫はお茶飲み仲間として扱われることを喜んでいくようになった。

家の玄関を入るとすぐ居間で、夫のベッドは玄関からよく見える場所にあった。来客は友人だろうと配達員だろうと、必ず夫の姿を見、声をかけていた。

「ストレッチャーに乗せる都合もあるでしょうが、それ以上に、地域とのつながりを絶たないようにする工夫だったんです」

一昨年6月、夫は自宅で息を引き取った。

高橋さんによると、お茶飲みはいまも続いている。残された妻のほかにも一人暮らしの人や、高齢を理由にサークルを辞めた人もいる。それでもお茶飲みでつながり、お互いを見守り合っている。

「ぎりぎりまで家で暮らす、つながりを切らない、孤立させないって、こういうことなんだと思いました」

高齢でも体が不自由でも、住み慣れた家で最後まで暮らすためには、住民同士のつながりこそ重要——その事実を目を開かされる出来事は、ほかに





## わがまちの お宝紹介

【東お茶っご会】若柳の米ヶ浦一  
東地区で毎月第3日曜に開かれる  
親睦サロン。メンバーは60~80歳  
代の女性13人で、元々お茶飲み  
おすそ分けを頻繁にする間柄。代

表の鈴木ちよのさん(78歳)が2012年12月、夫を亡くした友人を励まそうと集会所での親睦会を呼びかけたのが始まり。菓子や漬け物、手料理を持ち寄って午前9時頃  
から午後4時頃までともに過ごす。介護施設に入居した仲間の在宅復帰の希望を、会  
を挙げての見守り態勢で実現させた。

一連の動きのなかで会の代表、鈴木  
ちよのさん(78歳)は、ことあるごと  
に市社協若柳支所を訪れ、高橋さんに  
状況を知らせ、助言を求めた。高橋さ  
んは「本人がどうしたいかをよく聞  
き、皆さんに何ができるかを考えま  
しょう」とあえて具体策は提示せず、  
話し合いを促した。これが、会を小さ  
な協議体に変えた。在宅復帰は、仲間  
たちが自主的に対応を話し合い、実践  
した成果だが、時間を掛けて信頼関係  
を築いてきた高橋さんの適切な関与

が、住民の力を引き出した面もあるだ  
ろう。  
このほか高橋さんは、郷土料理を学  
ぼうとする地元高校生と会を引き合  
わせたり、「ときには美しく装いた  
い」という会の女性たちの要望に応  
じ、協力してくれる美容師を探して化  
粧教室を開くなど、新たなつながりを  
育む試みも行っている。  
こうした「地域のお宝」の掘り起こ  
しと今後の関わり方について、築館  
地区担当のコーディネーターで、第2  
層のまとめ役でもある細川律子さんは  
「ちょっとした手がかりからお宝を見  
つけ、良好な関係を持ち、さらに人や  
場をつなげていく高橋さんの感性と手  
腕はすばらしい」と述べている。  
10人いる第2層コーディネーター  
は、月に1度は定例会議で顔を合わせ  
る。「それぞれの取り組みを共有し、  
学び合える。それが私たちの強みでも  
あるんです」(細川さん)  
第1層を所管する市介護福祉課と  
も隔月で会議を開き、全体的な情報  
共有と生活支援体制整備の方針など  
を検討、確認する。  
一般市民向けの情報発信としては、  
市社協のホームページと年4回発行の  
体制整備情報誌で、コーディネーター  
の活動や地域のお宝、協議体の運営状  
況などを紹介。昨年11月には市民40  
0人あまりを集め、市主催のお宝発表  
イベントも開いた。また、第2層コー  
ディネーターはそれぞれ地区社協、ポ  
ランティア組織、民生・児童委員協議  
会などの会合やサロンに出向き、体制  
整備の解説や活動報告を行う。

「まずはお宝を『見える化』し、理  
解を広めたい」と高橋さん。将来に向  
けては「私たち一人ひとりが、自分  
のお宝を持てるようになれば」と抱負を  
語ってくれた。  
高橋さんは栗原市築館地区出身、  
在任の52歳。長く東京や大阪で暮ら  
し、20年ほど前に帰郷した。「離れて  
いたからこそ栗原のいいところが見え  
る」。2015年から栗駒山麓ジオ  
パークの公認ガイドを務める。生活支  
援コーディネーターの仕事は「地域の  
課題よりも、むしろいいところを探  
す。天職と思った」。栗原の美しい自  
然と、支え合える住民関係のガイドと  
なり、誰もが住んでよかったと思える  
地域を目指す。

利

あった。  
若柳の農村集落の一つ、米ヶ浦一  
東地区。月に1度、集会所で親睦サ  
ロンが開かれる。名称は「東お茶っご  
会」(囲み記事)。  
高橋さんは、コーディネーター就任  
以前の2013年、市社協が推進する  
小地域福祉活動の普及啓発事業を通  
じて同会を知る。以来、毎年数回は会  
に赴き、関係を維持。コーディネー  
ターになってからは、会の仲間が日常  
的にお互いの家を行き来し、お茶飲み  
やおすそ分けをしたり、買い物や頼  
んだり頼まれたり、車の相乗りで移動  
を助け合ったりする様子もつぶさに取

## お茶飲み場が協議体になる

昨年1月、会の仲間で一人暮らしの  
女性(89歳)が、救急搬送された。遠  
方にいる親族が電話応答がないのを不  
審に思い、近所の仲間に連絡。様子を  
見に行ってもらうと、体調を崩して寝  
込んでいた。1か月ほど入院。退院に  
際し、親族や専門職は「一人暮らしは  
難しい」と判断、グループホームへ入  
居させた。ところが、本人は自宅に戻  
ることを強く希望。しばしば面会に訪  
れていた仲間たちは、その願いをかな  
えようと、女性が自宅に戻ったときに  
は見守りを頻繁に行うことを申し合  
わせた。これに親族も理解を示し、女  
性は3か月後に在宅復帰を果たした。

材。月1回のサロンだけでなく、近所  
付き合いと日常の支え合いも貴重な地  
域資源(＝地域のお宝)と知った。  
ちなみに会の活動は「原則としてお  
茶飲み、食事、昼寝、そしておしゃべ  
りだけ」(高橋さん)。体操や脳トレ  
の苦手な人も気軽に参加できる。



市社協若柳支所で住民らと歓談する高橋由利さん(左端)

## 蔵王町

【ざおうまち】人口1万1888人(4485世帯)、高齢化率36・8%(2019年10月末)。町域は3中学校区、5小学校区、23行政区で構成。生活支援体制整備事業では町全体を日常生活圏とする。生活支援コーディネーターは町社会福祉協議会が1人を専任配置。協議体は町保健福祉課が所管し、生活支援コーディネーターとともに事務局を務める。構成員は町・県社協を含む介護、福祉関係団体および地域づくり団体の代表や住民代表など計14人。

# 「福祉」は地域に、 暮らしのなかに

## 小野聡さん



小野聡さん(同町社協の事務所で)

### お宝につながりを見る

「住民はずっと前から福祉や介護予防を行っているんです」

蔵王町の生活支援コーディネーター、小野聡さんが、町内の移動販売を取材した経緯について語っているとき、ふと漏らした言葉だ。

「行っている」の意味するところは、住民主体の生活支援サービスを立ち上げ済み、ではなく、何気ない日々の営みに福祉や介護予防の要素が存在しているということ。そうした要素を含む暮らしのあり方や住民活動が「地域のお宝」。

小野さんは、2018年5月にコーディネーターに就任して以降、さまざまなお宝事例を発見、取材してきた。ブログや小冊子、地域資源マップにその情報を掲載したり、住民の集まりに出向いて報告するなどして「見える化」に取り組んでいる。

ところが、取材を重ねるうち、「お宝」の定義の仕方に疑問を感じるようになった。「住民の生活の一部を切り取って『お宝』と言うだけでは足りない。本当に重要なのはお宝を生み出す住民同士のつながりだと思っています」

たとえば、お茶飲みをしながら一人暮らしの人を見守り、困りごとがあれば手助けするといったエピソードは、お宝事例としてわかりやすい。しかし、その背景にあるつながりそのものは、見えにくい。お宝事例の価値を認めても、つながりという本質が見落と

されては意味がない。

「住民はずっと前から」お宝としての場や支え合いを育んできた。つながりがあれば、お宝は自然に生まれてくる。地域づくりの根本は、つながりづくりにある。星々をつなぐと星座になるように、住民のつながりからお宝が浮かび上がる——そんな地域イメージの共有が求められる。「だからこそ、地域に入るときは、お宝事例を探すとともに、つながりをよく見るよう心掛けています」

小野さんは移動販売を高く評価する。買ひもの弱者対策だけでなく、つながりづくりに役立つからだ。

小野さんによると、町を地盤とする移動販売は2店(2019年12月時点)。いずれも福祉目的ではなく通常の商売だが、「結果として地域福祉に大きく寄与しています」

2店のうち1店は、固定の店舗を持たず、移動販売を専門にする「あいざわ魚店」(次頁囲み記事)。

同店の移動販売は、空き地や駐車場などに停車して店を開く場合と、客先を戸別に訪問する場合の両方がある。戸別訪問は見守りを兼ね、駐車場などでは客が集う「買ひものサロン」になる。

「店主の相澤幸一さんは、買ひものに行けない高齢者が増えているのを肌で感じ取り、『自分にできることをしてお年寄りの暮らしを支えたい、お客様の喜ぶ顔が見たい』と語ってくれました」

客のちょっとした困りごと、たとえ



## わがまちのお宝紹介



【あいざわ魚店】蔵王町宮地区に暮らす相澤幸二さん（73歳）が34年前から妻と2人で経営するは移動販売専門店。新鮮な魚介類をはじめ、惣菜や乾物、菓子・パン類、飲料などを品ぞろえ。町とその周辺地域を巡回し、買いもの弱者の生活を支える。「楽しみに待っていてくれるお客さんがいる。それが励み」と相澤さん。「利益より大事なものがある」と自主的に高齢者の見守りも行う。訪問先の家で倒れている人を発見、住民と連携し一命を取り留めたことも。

### お宝とお宝を結び合わせる

同町宮地区の集落の一つ、小浜川原は衣類をクリーニングに出せない、引き取りに行けないといったことがあれば、無償で代行。地区の人間関係を把握したうえで「あの人は元気だよ」と消息を伝えたり、町や地区のさまざまな出来事を語って聞かせたりも。「自分で買えるものができるとうれしさ、会話と情報交換の楽しさ、困りごとを聞いてもらえる頼もしさ。福祉事業でなくとも、移動販売はこんなに福祉的な活動になっているんです」

同町宮地区の集落の一つ、小浜川原

に毎週金曜の正午ごろ、あいざわ魚店が来る。合図の音楽を鳴らして空き地にトラックが停まると、近隣の家々から高齢の女性たちが出てくる。買いのをしつつ、にぎやかに会話を交わす。「あら〇〇さん来ないね」「歯医者に行くって」といったやり取りも。20分ほどの間、静かな集落の一角に活気が満ちる。

女性たちは買いたいものと昼食を済ませたあと、一軒の家に集まって手工芸品の制作とお茶飲みをともにする。その金曜午後の集まりは「小浜川原お茶飲み会」と呼ばれる。会員は近所に住む60〜90歳代の女性7人。小野さんが振り起こしたお宝の一つだ。会は6年前に住民の1人、大谷久美子さん（68歳）の呼びかけで結成。最初の2年間は大谷さん宅を活動拠点としていたが、孫が生まれるなどして手狭となり、すぐ近くの永久保幸子さん（90歳）宅に拠点を移した。永久保さんはひとり暮らし。「みんなが家に集まってくると楽しいし、安心していられる」と喜ぶ。活動は午後1時半から4時まで。開始前に移動販売で顔を合わせるのには、プレ・イベントのようなもの。

同店がこの場所で営業し始めたのは2019年8月。小野さんが会に紹介し、きっかけをつくった。お宝同士を結び合わせる試みだった。結び合わせは、これにとどまらない。同年6月、宮地区の商店街で音楽イベントが開かれる際、チケットとして来場者に革製ブレスレットが渡される



移動販売で買ったものをしていた高齢者に話を聞く小野聡さん(左)

ことになった。主催者側がブレスレット制作の依頼先を探していると知った小野さんが、会を紹介。会は制作を引き受け、イベント成功に一役買った。一昨年11月には地元で、初めて会単独の作品展覧会を開催。このとき寺と会をつないだのも小野さん。また、宮城県生活支援コーディネーター養成研修（実践講座1・3）で2019年1月29日、白石市を会場に「お宝発表会」が開かれ、小野さんが会の活動を報告。すると後日、同市の住民グループから「クラフトカゴの制作を習いたい」との声が届いた。同市の生活支援コーディネーター、山家結美さん（本紙23号に記事）と連携、両者の交流をお膳立てした。小野さんのつながりへのこだわりは、長く介護施設で働き、ケアマネジャーな

どを務めた経験も関係している。「介護施設に入居すると、つながりが切れてしまいます。人間関係は施設職員と家族だけ。なかには、家族の面会がほとんどない人も」そういうものとして受け止めていた時期もあったが、働きながら社会福祉士の資格を取り、考えが変わった。「地域福祉の概念を改めて学び、視野が広がりました」福祉は施設やサービスだけではなく、地域にも、住民の暮らしのなかにもある。「介護の現場経験を踏まえて地域づくりに取り組みたい」と生活支援コーディネーターへの転身を決意した。いまの目標の一つは、施設と地域をつなぐこと。「お茶飲み仲間の誰かが施設に入っても、施設から仲間の元に通えないか。難しい面はあるでしょうが、お宝同士をつなぐみたいには、施設と地域をつなげられたらいい」小野さんは、町に接する白石市福岡地区出身、在住の46歳。同町では有名な小野さつき（1922年、宮小学校に訓導「教諭」として赴任、川で溺れる児童を助けようと21歳で殉職）の親戚に当たる。「この話をすると皆さん驚くと同時に、親しみを感じてくれるようです。おかげでとけ込みやすい。さつきさんに感謝です」。そう言って笑う小野さん。百年近く前の縁にも助けられながら、未来へと向かうつながりづくりの歩を進める。

利

福島発

# つながりが災害時に命を守る

いがしまひさこ  
五十島寿子さん(福島県金山町・生活支援コーディネーター)

2011年7月29日、福島県金山町を襲った豪雨で町を流れる只見川が氾らん。町内各所で道路が寸断し、住宅104棟が被災した(全壊23、大規模半壊33、半壊29、床下浸水19)。当時の人口約2500人の半数近い1084人が避難を余儀なくされたものの、死傷・行方不明はゼロ。町社会福祉協議会の福祉活動専門員で、現在は生活支援コーディネーターを兼務する五十島寿子さんに当時を振り返ってもらった。



五十島寿子さん



ボランティアによる泥の撤去作業(写真提供:金山町社会福祉協議会)

「川があふれ始めたのは平日の午後。若い人は町場へ勤めに出ていて、集落には主婦や高齢者、体の不自由な人らが残っていた(※町の高齢化率は当時すでに5割超。2020年1月6日時点では人口1986人、高齢化率60・5%)。それでも犠牲者が出なかったのは、自主防災組織が整っていたからではなく、日ごろのお茶飲みなどを通じて住民同士がよくつながっていたことが大きい」

「川が危険な状態だと気づいた人が、避難を呼びかけた。どの家になんが、助けが必要なのは誰か、皆わかっていった。すばやく安否確認や避難ができ、道路が寸断され避難所へ向かえない状況でも、高台の神社に行くなど、相談し合って適切に対処した。お茶飲みの生活文化が命を守ったとさえ言えると思う(※注)」

「被災家屋の片付けなど、応急復旧にも日ごろのつながりが威力を発揮した。私たちが3日後に災害ボランティアセンターを運営し始めたころには、各集落の住民が自主的に被災状況を調査し、区長や民生・児童委員に情報を集約していたので、効率的にボランティアを派遣できた。『ボランティアが隣には来て、うちに来ない』といった苦情もなかった。住民も自主的に被災

家屋の片付けに駆け付けた。私の家は1メートルほど床上浸水したが、翌日には近所の人たち約30人が集まって片付けを手伝ってくれた」

「災害そのものの記録は多いが、お茶飲みなどで培ったつながりが避難と復旧に役立ったことは、ほとんど記録されていない。住民も日ごろのお茶飲みなどの重要性を特に意識していない。そのあたりの意識化を促し、つながりを保っていけるようあと押しするのは、私たち生活支援コーディネーターの仕事だと思う」

「災害に強い集落づくりも、高齢でも暮らしやすい集落づくりも同じ。日ごろから声を交わし、気軽に家を行き来できる関係が鍵だ。この本質は、生活支援や自主防災の仕組みではなく、日ごろのつながりにある」

「災害時こそ私たち生活支援コーディネーターは地域にしっかりと関わらねば。ボラセン運営はもとより、積極的に現場に赴き、被災した住民の話に耳を傾けたい。その経験は地域づくりのあり方を考えるときにもきっと役に立つ」

※注II 全国コミュニティライフサポートセンター(CLC)発行の「地域支え合い情報」83号(2019年10月発行)に関連記事)

利





# 2019年度 第2回情報交換会を開催しました

宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議は、今年度2回目となる情報交換会を県北・県央・県南の3か所で開催しました。ここでは、19年11月に登米市で開催された県北部会場（9市町村から行政職員や生活支援コーディネーターなど70人が出席）での活発な情報交換の一部を紹介します。

## 庁内（組織）内連携の効果的な進め方

- 全課が集まり、勉強会を行っている。
- 身近な担当部局との連携から広がっていく。
- 職員が地域に出向けなくても、民生委員・児童委員やNPO、他部署の職員などがかわった情報を把握するだけでも、連携になる。
- 行政と社協で一つの地域福祉計画をつくったことで、委託元と受託側の目的が一体となって事業を進めることができている。
- 行政と生活支援コーディネーター、地域包括支援センターで情報交換会を行っている。
- 地域ケア会議を利用するなど、生活支援コーディネーターと専門職で情報共有できる場があるといい。
- 体制整備事業だけで区切らず、大枠で捉えて介護事業などに広げると、生活支援コーディネーターが動きやすくなる。そうした雰囲気や行政や地域包括支援センターがつくることも大事。

## 協議体や協議体のような話し合いの場で得られること、大変さ

- 2層協議体で移送サービスを始めようとしたがハードルが高かったため、方針を転換して遊休地でのグラウンドゴルフの実現を試みている。協議体は、形式に捉われずに進めて、できるところから取り組むことが大事。
- 地域の情報が得られる。地域性や課題を知ることができる。
- 専門職は介護保険や介護予防に目が行きがちだが、子どもを巻き込むべきとの声が協議体のメンバーからあがった。協議体でお互いが思っていることを共有でき、気づきを得られる。
- 協議体の1～3層に行政職員が参加して、地域と行政とのつながりができている。
- 台風や水害を契機に、災害や地域について協議体で考えることにつながっている。
- 1層は、普及啓発や2層・3層をまとめる場としてはいいが、人数が多く、変動があるため、具体的な活動につなげるのが難しい。住民主体の具体的な活動を目指していくのは、2層や3層が適している。
- 話し合うエリアの難しさ。生活の実情にあった小さな単位でなければ、住民が何に困っているか、どうやって暮らしたいかが見えない。
- 団体の代表である協議体の出席者から理解を得られても、そこからなかなか広がらない。
- 話はたくさん出るが、収集がつかない時がある。地域差が意見の違いに。

## 自分の地域（お宝）自慢

- 老人会がなくなったことをきっかけに、会に所属していた仲間でお茶飲みを始め、組織によらない住民主体の集い場ができた。
- 休耕地での住民主体の農園づくりやお茶飲み。近隣の老人ホームの利用者も参加して、地域とのつながりや役割をもっている。
- 雪かきの住民ボランティアが自然発生的にできた。
- 住民有志で、単身世帯を気にかけて、修繕作業を無料でやっている。
- 地域支え合い協力員の存在。民生委員・児童委員との協力関係。
- 台風被害で設置された災害ボランティアセンターに、高齢の住民が大勢ボランティアとして来てくれた。
- 地区社協が活発に活動している。
- 地域課題を関係機関につなぐだけでなく、住民同士で支え合っていくことが、住みやすい地域づくりでたいせつだとわかった。
- 住民同士の伝統的な互助組織「頼母子」があって、続いている。

## 見つけたお宝の活かし方（発表会以外）

- お宝をマップに落とし込み、見える化。受託している社協内部のケアマネジャーに配布して、活用してもらう。
- 地域包括支援センター、ケアマネジャーへ情報提供し、共有する場を持っている。
- 地域包括支援センターが、デイサービスの利用相談に来た住民に地域の集い場を紹介した。その住民は、地域で見守られながら楽しく暮らせている。介護保険を利用しないでいられるのも一つの成果。
- 広報紙「社協だより」に2か月に一回、見つけたお宝の紹介記事を掲載。それを読んだ住民が意見を発信できる懇談会も設けている。
- できている活動をインプット。住民の集まりを訪問する際に他地区での活動例を紹介して、ヒントにしてもらう。いずれ住民間をつなぎたい。
- 事業所に地域の活動を紹介し、参加してもらう。
- 活動の当事者に活動の意味づけをして、意義を理解してもらう。
- ニーズの担い手の掘り起こしに。
- 地域のキーパーソンに向けた「活動のヒント集」もあるといいのでは。

上記のグループワークを踏まえて、大坂純運営委員長は、「探したお宝を共有し、見える化して、事業計画などをつくっていく時期に来ている。その先は、地域包括支援センターやケアマネジャー、住民組織などをつなぐ力が問われる」と総括しました。

# コーディネーターの活動も『見える化』

## 来る2月14日のセミナーで

第4回「宮城発これからの福祉を考える全国セミナー」が2月14日、仙台市の太白区文化センター楽楽楽ホールで開かれる。注目したいポイントについて、事務局の佐藤正さんと菊池琴美さんに聞いた。

### —何を学べるのか

**菊池**「地域づくりの木の図で言う『根っこのお宝』と、お宝を地域づくりに生かす意義と方策について、具体的に学べます。お宝を頭ではわかっているけど、生活支援コーディネーターとしてどう関わるべきか悩む方には、参考になります」

**佐藤**「登壇する生活支援コーディネーターが、その活動やお宝をどう表現するかにも注目です。お宝だけでなくコーディネーターの活動もまた見える化する必要があります。所属先の上司や同僚、行政の担当者に、コーディネーターとして高齢者のお茶飲み場などに通う理由や狙いをどう伝えるべきか、考えてほしいと思います」

### —協議体に関しては

**菊池**「今回は、既存の話し合いの場に生活支援コーディネーターが関わる兵庫県淡路市の実践と、新たに立ち上げた協議体で活発な話し合いが行われている角田市の

宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議事務局



事務局を務める宮城県社協の佐藤正さんと菊池琴美さん

事例を紹介します。地域に合った協議体のあり方を探る一助になればと思います」

**佐藤**「このセミナー自体も一種の広域協議体と言えます。住民、有識者、地域づくり団体、行政、社協、地域包括支援センターその他の連携、協働で成り立ち、暮らしやすい地域づくりについて多様な意見、情報を交換する場ですからね」

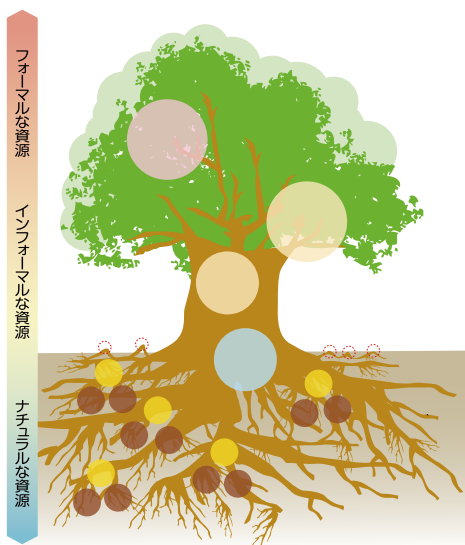
### —学びを現場にどう落とし込むべきか

**菊池**「地域づくりのスーパーマンみたいな人は登場しません。これなら真似できると思える事例をぜひ真似っください。ただ、事例の一つ、茨城県日立市の『<sup>はなやま</sup>塙山学区住みよいまちをつくる会』は、話し合いをしながら進化し続ける住民自治型の地域福祉活動組織です。簡単には真似できませんが、地域づくりの一つの将来像をイメージするのに役立つでしょう」

### —生活支援コーディネーター以外に、どういう人に参加してほしいか

**佐藤**「関心のある人は誰でもですが、あえて言えば、介護・福祉の専門職や生活支援体制整備を所管する行政の方に来てほしいと思います。住民主体の地域づくりは、生活支援の仕組みづくりからではなく、まずお宝を生かすところから考えるべきだということ、そのために生活支援コーディネーターが地域に入るのだということを知ってほしいんです」

セミナーに関する問い合わせは事務局まで(仙台市青葉区本町3-7-4宮城県社会福祉会館3階、電話022-266-2621)



地域づくりの木